



Save The Earth

地球温暖化について

大

気中に酸素ができて、その酸素原子からオゾンが合成され、地上に生物がすめるようになってから4億年、人類が現れてから2百万年がたったと言われています。オゾン層に異変が起き始めてからわずか数十年というのですが、オゾンを破壊しているのはすべて人間です。その原因がフロンガスであると分かり、あわてて1988年「オゾン層の保護のためのウィーン条約」が採択され日本も加入しました。この条約に基づき、オゾン層を破壊する物質に関するモントリオール議定書」が採択され、フロンなどの製造と消費、貿易を規制しました。しかし規制はなかなか徹底しません。

その後アメリカの企業によって代替フロン（ハイドロクロロフルオロカーボン（HFC）やハイドロフルオロカーボン（HFC）など）が開発されました。ところが二酸化炭素以上に強力な温室効果のあるガスだと分かり、これらはオゾン層も破壊することでも分かりました。したがってモントリオール議定書にはこれらのガスも製造禁止に加えられることになりました。

アメリカの科学雑誌「サイエンス」に最近発表された論文によると、空

素肥料や硝酸などを作る化学工業から発生する「亜酸化窒素ガス」なども、オゾンを破壊する大きな役割を果たし、温室効果ガスであると分かりました。人間が作り出したガスは多かれ少なかれ環境破壊につながっているようです。

問題は目に見えないが有害ガスが大気中に増えてくるとオゾンホールが大きくなるということです。先の号でオゾンホールの現象は南極大陸の現象であると書きましたが、然に非ず、この春北極でもオゾンホールの破壊が進んでいることが日米などの観測チームの調査で分かりました。熊日新聞にも掲載されましたが、平成23年4月上旬、北極圏のオゾンの80%が減少していることが分かりました。

北半球には緯度が高いところにもたくさんの方が住んでいるし、他の生物にも有害な紫外線の増加が心配されています。スカンジナビア半島、ロシア北部、カナダ北部などでも紫外線が増加していると思われます。北極は元々オゾンの密度が高いため南極ほどオゾンが薄くなっているといわれていますが、破壊されたオゾンの量は南極のオゾンに匹敵するほどであるということです。

農作物の稲や大豆などは紫外線に

特に弱いということですし、エビやカニの幼生、魚の稚魚などのプランクトンも紫外線に弱いということだから、それを餌にする魚類も減るのではないかと心配されています。オゾンホールの問題は両極付近ばかりではなく地球全体で減っていると考えられます。日本上空のオゾンは10%も減ったという観測結果もあります。北半球は海陸の分布が複雑で大規模な山脈も存在するので大気にロスビー循環というのが発生し、オゾンホールの片々がこの4月には日本の上空にも達したといわれています。最近の気象情報に、紫外線情報を出しているところを見ると、何か油断ならないような事態になっているような気がしないでもありません。

歴史調査の楽しみ方

日平城跡28

復

習の2回目です。今回は、西側主軸尾根と、2つの派生尾根を取り上げます。

西側主軸尾根は、長さ450mで、尾根筋を利用して、山道が日平集落へ延びています。山腹には、凹道や深く挟まれたV道もあります。特に、麓近くでは、土橋の様な部分もあり、総じて、馬道城内に兵糧を運び込む道に相應しい造りです。

肩部に位置する小山群も、重要な役目があります。8か所（A～H）の内、岩山のF・Gを除くと、いずれも、上面が平らに造成されています。これらの小山に立つと、西方向から南西方向に、有明海や菊池川の河口が、遠望できます。南方向では、玉東・山北の山並が間近に視野に入ります。いずれも、物見の場であったと思われる。

2か所の岩山（F・G）には、裾部のわずかな所を山道が抜けています。肩部に岩壁が迫り、縁下は急な傾斜地で、通行に困難なところです。城門を設置するには、最良の場所でしょう。

小山Aの北下にある堅堀（谷部を利用）も注目されます。堅堀の末端部が岩清水に変化する所に、水汲み場と考える個所があります。Ⅲ郭―Ⅰの井戸水を補った水源と思われます。

西側派生尾根は、小山Dから真北に延びています。長さ180mで、端部は小山になっています。小山の斜面部に手が増えられており、北西方向の玉名市側が望めます。東方向では、深谷を挟んで、Ⅰ郭の山頂部分を見上げる格好になります。

南西側派生尾根は、小山Cから延びており、長さが250mあります。端部は、西側派生尾根と同様に小山になっていますが、造成の度合が、非常に高くなっています。頂きは、ほぼ平らで、直下の斜面部は、削り落されています。さらに、南東下の鞍部（尾根のくびれ）には、堀切の埋没が予想されます。ここからは、特に、玉東方面が、身近に感じられます。

この様に、日平城跡では、数多くの尾根筋が、縄張りの中に取り込まれている事が分かります。高山（標高

の高い山という意味です）に築かれた山城は、それだけで、城としての機能をも十分に果しますが、さらなる利便性を加えるために、数多くの土木工事がなされています。兵糧の搬入や、環境の維持管理にも、多くの努力と、豊富な資金が必要になります。

戦国時代の後半ともなりますと、領主は、領域の中に複数の城郭を有する訳ですから、苦勞の程が忍ばれます。それを陰で支えていた領民も、大変だったでしょう。

大田 幸博

（元・菊水町史編纂委員会副委員長）



日平城跡 西側主軸尾根周辺図